諏訪小だより

令和３年１１月３０日
１２月号
多摩市立諏訪小学校
校長　齋藤　幸之介

意味や価値を共有できること－これからの教育のあり方から考える

校長　齋藤幸之介

先日のある土曜日、私は椅子に座って校庭を眺め、サッカーチーム「ムスタングＦＣ」の子供たちが練習をしている様子を見ていました。レベルの高い練習をしているな、と感激をしておりました。

練習が終わり、片付けが始まりました。数名の選手が、グラウンドを平らにする「レイキ」を使って整備を始めました。きっと疲れているだろうに、と思うと、その姿に一層深く感激をしました。

野球チーム「諏訪インディアンス」が使用した後にも、ピッチャーが投げるマウンドを中心に円を描くようにブラシがかけられていることがあります。野球を経験した者として、ここに改めて足を踏み入れる緊張感を想像すらします。

こうして、本校のグラウンドを大切に使用している姿に感謝の気持ちをもつとともに、こと本校ではどうしてこのことを大切に考えたいかを、以下に述べたいと思います。

抜群の水はけのよさと、これを維持する難しさ

本校のグラウンドの広さは言うまでもありませんが、同時に、「水はけのよさ」も特徴の一つです。例えば、朝方かなりの多くの雨が降って水が浮いていても、グラウンドは、うまくいけば中休みに、遅くとも昼休みには子供たちが遊ぶ場になります。

しかし、このことは一朝一夕にできるわけではありません。例えば、本校が開校する際に地面を掘り起こすなどして水はけのよいグラウンドとして設計・施工されたこと、また私共の先輩教員が維持するための手立てを講じたことが推察されます。

ですから、「ムスタングＦＣ」も「諏訪インディアンス」も、きっとこのことを理解しながら、指導者の方々の下グラウンドを大切にしてくれているんだ、と思うわけです。

意味や価値の共有

このことには、学校施設を単に大切に使うだけでなく、例えばグラウンドの望ましいあり方やこれを踏まえた維持についての意味や価値を、私共と同じように考えてくださる方々がいらっしゃるからこそ、と感激をします。もちろん、学校の立場だけ申し上げればこれに不満をもつ市民もいるでしょう。逆に、使用の仕方が不適当であれば、こちらから御注意を申し上げる場合も生じてまいります。

だから、こうして相互に共有できることが、実は大いに有難いことであるのです。

これからの学校像を描きながら

さて、本校ではすでに「地域学校協働本部」を立ち上げております。これにより、多くの方々に賛同をいただきながら、総合的な学習の時間を始めとする様々な教育活動に御協力いただいたり、コロナ禍で中断をしておりますが近々再開予定の「すわっ子地域未来塾」などを行っていただいたりしています。

来年度は、地域学校協働本部を中核に据えつつ、「コミュニティ・スクール」として新たな出発をする予定です。今までは保護者の皆様や地域の方々の「協力」を得ながら学校運営をしてまいりました。今後は、このことを踏まえながら、保護者の皆様と地域の方々と学校との「距離」をぐっ、と縮めながら一体となり、子供たちの学びと成長を支える仕組みとしての学校にしていくことになります。

このときに求められることの一つが、今回申し上げたグラウンドの事例ではないか、と考えています。口幅ったい言い方になりますが、「船頭多くして船山に上る」では、学校教育は立ち行かなくなります。学校経営方針を御理解いただき、同時に御意見を頂戴しながら改善を図るために、意味や価値を共有することを改めて大切にしたい、と考えておりますがいかがでしょうか。

「共有」の難しさは、言うまでもありません。このことを常に念頭に置きながら準備を行い、令和４年度を迎えたいと思っております。詳細につきましては、本年度最後の保護者会の際に御説明をしたい、と考えております。

末筆になって恐縮ですが、本年も多方面に亘って御理解と御協力を賜り、ありがとうございました。コロナ禍で全てが叶えられたわけではありませんが、少しずつ「日常」を戻すこともできましたことに、深く感謝申し上げます。

少し早いですが、どうぞよいお年をお迎えくださいませ。

＜参考＞
「ともに育つ、ともに生きる地域の学校を目指して」
多摩市教育委員会